



えんこうそくげつ
猿猴捉月



Adult Only



序之一・帝都——襲来

漆黒。

かちりの空。

夜。

月は輝き。

星々は黒の天鵝絨ビロードの上で瞬く静かの夜。

新たな主を迎えた純白の江戸城も。

朽ちていく兆しが見え始めた立派な元武家屋敷も。

人々で賑わう長屋も。

数を増やしだした洋館も。

高く高く聳え立つ凌雲閣りょううんかくも。

何もかも——無数の星が煌めく墨空すみぞらの下に在る。

満開の時期を超え咲き乱れている桃の花も、その例外ではない。

せつかな花片はなびらが時折はらりと仲間から離れ、不規則に

宙を舞い、音もなく地面へと落ちていく。

常闇色とこやみいろの空気にほんのり甘い香りを漂わせ、花片がちら

りちらりと降る中で……琵琶の音が風に乗ってくる。

重なるよう、囁ささやれた老人の声も聞こえる。

浄、浄、浄、と。

重く儚く響く琵琶に合わせ、枯れ声の琵琶法師が歌を紡ぐ。

新たな異妖者ことものの王を迎え。

年号が馴染み。

ますます様変わりして行く、この街のことを。

魔都、帝都のことを。

——そして、その音の横を通り過ぎる一団があつた。

ザッ、ザッ、ザッ。

魔都の夜下に軍靴の響き。

先頭を往く者は、黒いケープに豪華な意匠の緋色を纏っていた。

固い印象を与える緋色の洋装は、立派な軍服。

華やかな軍帽の陰に端正な顔立ちを隠し、威風堂々と歩いている。

チャリ、チャリ、チャリ、チャリ。

歩く度にマントの下の刀帯の金具輪が小さく鳴る。

そこにぶら下がるのは西洋の剣を模した軍刀ではなく、

二尺八寸の日本刀。



立派な軍服を纏う先頭者に従うのは、同じ緋色だが意匠は簡素な軍服を纏っていた。

全員、先頭を歩く者と似たような長さの日本刀を下げている。

緋色が歩くごとに従う者の数が増える。

始め三人ほどだったのが、五、七、十三、二十と。

緋色の一団は歩く。

軍靴を響かせる。

新たな異妖者の王を迎え。

年号が馴染み。

ますます様変わりして行く、この街を。

魔都と化した、帝都を――



一・逢梗桐デノ出来事

『手入れされていないからこそその美しさがある』

という家主の言葉により、放置され鬱蒼とした庭の木々の合間から、カラコロと小さな下駄の音がする。

それに重なるチャリチャリチャリと真鍮がぶつかり合う軽い音。

その後をついてくる、ぼてぼてと柔らかい足音の束。

茂みの奥で下駄の音が止むと、柔らかい足音の束もぴたりと止まった。

木々の隙間から見えるのは白い漆喰壁。大きめの土蔵だ。

「えーっと、これかな？」

声は少女のものだった。それは蔵の扉の前からする。

少し長い髪を三つ編みのおさげにした、その少女——千代は、手に持つ真鍮の鍵束の中から一つ、大きめの鍵を選んだ。

真鍮の輪に通されている他の鍵が滑り、大きくジャランと鳴る。

千代は大きな錠前に左手を添えると、右に持つ鍵を差し込んで回した。カチャンと解錠の音がする。

「じゃあ、こっちはあたしが開くから、そっちお願いね」千代は俯いて、まるで自分の年下の兄弟達に接するように、声をかけた。

千代の声に頷いたのは、動くさるぼぼ達だ。

さるぼぼ——民芸人形。

しかし、千代が話しかけているさるぼぼは、ただの人形ではない。自らの意思を持ち動くよう、家主に作られたものだ。

背丈一尺ほど。

おおよ凡そ三等身の真つ赤な全身に、まんまる顔はのっぺらぼう。

紺の布地に白い井形模様の三角巾。

そして、黒い腹掛け。

人形は、皆、自立している。歩いている。一体ではなく、七体で。

漆喰の観音扉についている真鍮の取っ手の輪を、千代は両手で掴み、引いた。

「よいしょっと」

ギイイと、経年劣化に軋む金具の音がして、ゆっくりと重い扉が開いた。

もう一つの扉を開こうと、さるぼぼ達が色めき立つ。まず、さるぼぼ達の長である吹雪が身軽に跳び、はっし



と取っ手の輪を掴んだ。

ふらふらと宙で揺れる吹雪の足を、綿雪が跳んで掴む。続いて、綿雪の足を双子である餅雪が跳んで掴んだ。

最後にさるぼぼの中で、尤も力自慢の雪崩が綿雪の足を跳んで掴み、ぐうっと引く。

千代が開いた時より速い経年劣化の金具の音がして、重い扉は開いた。

「ありがとう。みんな、姐さんの為に働くの好きだよね。あたしも好き」

千代は嬉しそうに言って、真鍮の格子飾りのついた木製の引き戸を解錠して開いた。古い匂いが漏れてくる。

まずは、さるぼぼ達が賑やかに。

続いて千代が、そうっと土蔵に入った。

壁の高い位置にある小さな格子窓。

そこから入り込む光を頼りに、千代は辺りを見回す。

長方形の土蔵は奥へと長い。

左に階段箆笥があり、二階へと続いていた。

右と正面に、楠で造られた、しっかりとした棚がずら

りと並んでいる。

棚板のすべてに箱がいくつも並んでいた。

千代には、どこに何があるかまったくわからない。

肝心の家主である珠沙華にもだ。

珠沙華の祖父である、数年前に鬼籍に入った百雲も把握してないかもしれないと、千代は珠沙華から聞いている。

では、ここに何があるか、現状で把握しているのは——
「それじゃあみんな、お願いね」

さるぼぼ達だった。

祖父が亡くなった後、季節の移ろいに合わせて必要な道具がどこにあるか、珠沙華はざっくりとしか把握していなかった。自分で確認するのは骨が折れると思い、さるぼぼ達に命じ、どこに何があるかわかるよう整理整頓させたのだ。

千代の願いに、さるぼぼ達は『承知』と言うようにびよんぴよんと軽く跳ね、散開した。

土蔵の扉を開いた時のように、連携技を駆使して、必要な物を棚から取り、千代の足元に置いていく。

それを数度繰り返した後、七体は千代の前にずらりと横に整列した。

「必要なものはこれだけかな？　じゃあ、縁側まで運んでくれる？」

一斉にくくりと頷き、さるぼぼ達は配置についた。

四方一尺の桐箱が二つ。一つを雪崩が。もう一つは吹雪が。どちらも頭の上に載せる。



三尺三寸の細長い桐箱は、綿雪と餅雪の双子がそれぞれ端を持ち、頭上に掲げる。

四体が持つ物より小振りな箱や細い棒は、おっとりした根雪ねゆきと不器用な小米雪ここめゆき、無邪気な細雪ささめゆきが持った。

吹雪を先頭に、さるぼぼ達は蔵を出る。

最後に千代が出て、施錠を終え、列の最後尾についた。早春の光の転がる、しっとりとした苔の道。さるぼぼ達と千代は、ご機嫌にぼてぼて歩く。

カラコロと数歩歩いて、千代の口から鼻歌が流れ始めた。童歌わらべうたのような民謡のような適当な歌は、少し開けた中庭に到着してから止まった。

左には、まだ季節が早い為、蕾をつけぬ大きな枝垂れ桜。正面には母屋の縁側が見える。

雪崩と吹雪は、箱を掲げたままで沓脱石くつぬぎいしに飛び乗り、その勢いでまた跳んで、すたりと縁側に着地した。

そこに箱を置くと、他のさるぼぼ達が掲げる荷物を受け取り、箱のそばに並べた。

「まずはこれかな？」

運んで来た荷物の前に座る千代の問いに、吹雪はこくりと頷いた。

千代が指さした、細い長方形の桐箱に巻き付けられた紐

を、小米雪がおろおろと解く。

続いて、根雪がそつと蓋を開いた。

中に入っているのは、巻いて仕舞われた尺八立の掛け軸だ。

軸に巻かれている紐を、千代は慎重に引いて取り出し、吹雪に渡す。

その間に、千代によって拭き清められた床の間とこでは、雪崩を一番下にして、さるぼぼ達が縦に連なっていた。

吹雪は軸を両手で大事に持ち、さるぼぼ達の肩から肩へと飛び乗って、高い位置にある金具に掛緒かけおを引っかけた。位置を整え終えると、慣れた所作で軸の紐を解く。

千代は解かれたのを確認すると、吹雪を両手で支え、ゆつくりと下ろす。

床の間に、ぽつと花が咲いた。

描かれているは満開の桃の花。

あまりに見事な筆致ひつちに、千代はいつも花の香かがするような錯覚を覚えた。

全員が床の間を下りてから、双子のさるぼぼが緋毛氈ひもうせんを敷いた。

根雪と小米雪がのんびりと親王台しんのうだいを箱から取り出して、いるのを、細雪は楽しそうに眺めていた。



「それじゃあ、次は……これね」

吹雪と雪崩が正座している前に、二体が運んできた正方形の桐箱があった。

箱を挟んで千代が座ると、二体は同時に桐箱にかけられていた紐を解いた。

「吹雪と雪崩はどっちにどっちが入ってるか知ってるの？」

千代の問いに、二体は互いを見て、くすくすと笑い合う。「意地悪。どっちにどっちが入ってるかわかってるでしょ。えっと、じゃあ……こっちは女雛様！」

言うと、千代はわくわく顔で右側の桐箱をそおっと開いた。

箱の中から見えるのは、煌めく赤の絹に金や色とりどりの糸で艶やかな刺繍が施された豪華な衣裳。その天辺は半紙で包まれていたが、そこからは真っ直ぐな黒髪が長く長く垂れている。

「当たり。こっちは女雛様」

千代は身につけているフリルのエプロンで軽く手を拭ってから、慎重に手を入れ、そっと上げた。

大きな九番くばんの女雛の重さをずしりと感じる。ゆっくり、ゆっくり、持ち上げる。

衣裳の天辺……頭部にぐるりと巻かれた半紙の端を指

で摘まみ、神妙な顔で殊更慎重にはずした。

音もなくはずれた半紙の下から、ぱつちりとした黒い瞳に長い睫の、愛らしい女雛の顔が現れた。

珠沙華の家で働くようになってから、千代は雛祭りを楽しみにしていた。

珠沙華の雛人形が大好きだからだ。

自分の雛人形を持たない千代に、『あたしのを自分のと思っていいいわよ』と珠沙華は言ってくれたが、『こんなに凄いお人形、自分のだと思ふなんて無理です』と慌てて告げた。桃の節句になったら、出すのを手伝わしてくれるのが一番良いとも。

「いつ見ても可愛いな……」

掲げ持つ女雛の向こうの枝垂れ桜の幹を見て、千代はあの時の珠沙華の姿を思い出し、顔を曇らせる。

「このうちも変わっちゃったな」

千代が逢梗おうきようどう桐の家に通い始めの頃、迎えてくれるのはいつも鍛冶場から聞こえる、カンキンカンキン、固い物を叩き続ける音だった。

それが聞こえなくなったのと入れ違いで、雨月がやって来た。

その雨月に珠沙華は――



助けようとした千代に、珠沙華は『ここから動きたくないの』と止めた。

そう言つて微笑む珠沙華の凄絶な美は、千代の記憶に明瞭に刻まれている。

愛される者にされた仕打ちに対する無上の悦び。

もう二度と会えないかもしれないという底なしの悲しみ。

どちらも与えてくれたのが雨月だから——すべて受け入れたい。

それらが雨月から与えられた最後の行いになるかもしれないからと。大事にしたいからと——

そう言つて、珠沙華が雨月のつけた無体の跡を白い指でなぞっていた光景を思い出しながら、千代は女雛を膝に置いた。

真っ白なエプロンに赤い衣裳の女雛が映える。

珠沙華から夏にもらった西洋風のエプロンは、当初、千代には大きかった。その時より背が伸びた今は少し大きい程度になっている。

膝から落ちぬよう、注意深く女雛から左手を離し、エプロンのポケットに指を添えた。

その中に、お守り袋ほどの小さな巾着袋を入れていた。千代が自身で作ったものだ。

袋の中には黒い鼈甲べっこうの櫛の齒の欠片が一つ入っている。このエプロンを珠沙華からもらった時、ポケットに入っていたものだ。

千代は目を閉じる。珠沙華に櫛の欠片を託しただろう少年のことを思い出す。

端正な白い顔をくしゃりと歪め——

『もいい』

千代に向かって、両手を広げ駆け寄つて——

『思い出してくれてありがとう』

結局、彼が人の姿となつてからは、ふれることさえなかった……

「梳涅君……」

玄関の引き戸が乱暴に開いた音に、千代ははつと顔を上げた。

さるぼぼ達も、びくりと身を震わせて、揃つて玄関の方を向く。

この家の主である珠沙華は、情人である雨月と出かけている。

花屋敷……浅草公園へ行き、夜は銀座で食事をして帰宅すると言っていたから、帰つて来るにはまだ早い時間だ。何より気になるのは、戸の開閉の乱暴な音だった。



珠沙華も雨月も、乱暴に開け閉めしない。

だったら、誰が来たのか——と、千代が女雛を桐箱に戻そうとした、その時——廊下が続く襖が開いた。

開いた向こうに立っていたのは、黒ケープに、立派な緋色の軍服を纏った女性だった。

座敷に入り込み、縁側に座る千代に近づいてくる。

顔の上半分が軍帽のつばに隠れるよう深く被っているが、見上げる千代からはしっかりと見えた。

珠沙華とはまた違う美貌がそこにあった。

理知的な印象を与える切れ長の鋭い瞳。意志の強さを象徴するような凛々しい口元。短く切られた髪は緩やかに白い輪郭にかかり、優美であった。

魅了されたかのように呆けている千代へ、女は突き放すような視線を呉れる。

「報告にあつた容姿とは随分と違いますね。珠沙華」

ゆったりと響く冷たい声を浴びせかけられ、千代は我に返り慌てて応えた。

「……あつ、あたしは珠沙華姐さんじゃありません。姐さんは出かけています。あの……失礼ですが、どちら様ですか？ 姐さんにはお客様がいらつしやると聞いてませんけど……」

おどおどしつつも、警戒心はしっかりと持って対応する

千代に、女は表情を一切変えず、静かに言った。

「私は必刀隊隊長、逢梗桐天雄と申します。逢梗桐百雲の娘であり、珠沙華の父である陽芳の姉です。ですから、珠沙華の伯母……姪の珠沙華より正当な逢梗桐の跡継ぎとなります」

『百雲の娘』、『珠沙華の伯母』、そして……『正当な跡継ぎ』——

千代の頭は混乱と疑念で満杯になった。

珠沙華の家に通うようになって何年も経つ。

その前から逢梗桐家の噂は色々と聞いている。

その中で、百雲に娘がいることや必刀隊など、まったく聞いたことがない。

「ここに住むのは珠沙華だけと報告を受けています。貴方こそ、他人の家で何をしているのですか？ 速やかにここから退去願います」

胡乱な者から頭ごなしに命じられ、千代の混乱と疑念は、怒りと理不尽に変貌した。

——ここは姐さんの家なのに、その姐さんに留守を預かるよう言われたのは自分なのに——と。

「もう一度言います。貴方がいらつしやることを、この家の主の姐さんは知ってるんですか？ お客様なら留守を



預かっているあたしがお相手します。お茶を淹れてきますから、少し待っててもらえますか？」

「ここは今より私の住屋じゅうおくとなりました。私がこの家の……父、百雲の意思を注ぐ逢梗桐の主です。この家のことを決めるのは主である私。その主が今一度命じます。貴女は速やかに退去なさい」

「そんなこときけません！ 貴方こそ、ここか、ら……」
千代は目を瞠みはる。

いつの間に、そこにいたのかわからない。

天雄の背後に何人もの緋色の軍服を纏った兵士が立っていた。

全員が軀の正面を千代に向け、腰に下げる日本刀の柄に手をかけているのだ。

背後に冷たいものを感じた千代は、そおと振り返る。声が出なかった。

中庭にも、いつの間にか何人も兵士が立っていた。

天雄の背後の兵士達と同じよう、腰に下げた日本刀の柄に手をかけて。

戸惑う千代を守るべく立ち上がったのは、さるぼぼ達だ。七体のさるぼぼは、千代を囲んでぐりと立つ。千代に背中を向け、堂々と。

それを見た千代の脳裏に浮かんだのは、自分が斬られるところではなく、さるぼぼ達が切り刻まれる光景だった。

「だっ……駄目、逃げて!!」

緊張に掠れた声で千代が叫ぶ。

それを皮切りに兵士達が千代とさるぼぼ達に向かって突進してきた。

さるぼぼ達は千代を守るように、千代はさるぼぼ達を守るように。背を丸め、互いにかばい合う。

「刀を使つてはなりません。私の屋敷を血で汚さないでください。穢れます」

天雄の命令に従い、兵士達は刀の柄から手を離れた。

刃に変わって千代達に向かってくるのは、兵士達の手、手、手。

無数の掌の向こうにある兵士達の顔は、深く被られた軍帽によって陰の底に隠されていた。

その暗闇で、ぎろんと光るもの。

それが兵士の目であると、千代はすぐに気づけなかった。なぜなら、兵士の眼球には、本来はないもの……呪術じゆじゆつが

施された跡——呪痕じゆこんが刻まれていたからである。

呪痕目の兵士達の荒波に、千代もさるぼぼ達もみくちゃにされ、千々になる。

「いやっ！ 離して！ このっ……くっ！」



千代は、兵士数人に軀を絡め取られてしまった。

渾身の力でもがくが、兵士達の手の力が緩むことはない。むしろ、もがけばもがくほど絡みついてきて、がっちり
と抑え込まれる。

もがく千代を数人がかりで抱えた兵士達は、長い廊下を
素早く走り、開け放たれたままの玄関を抜ける。

数寄屋門の前に着くと、竹の引き戸の向こうへ、千代を
乱暴に放り投げた。

「あうっ！」

地面に強く打ち付けられた千代だったが、目の眩む痛み
を堪え、大慌てで立ち上がり、閉じた引き戸の引手を力強
く掴む。

「何するんですか……えっ……？」

閉じられた引き戸を開けようとしたが、びくともしない。

「どうして!? 朝はするっと開いたのに……! くっ、
んっ、んんんんん!!」

裸足の足にぐうっと力を込めて開こうとするが、引き戸
はまったく動く気配がない。

「そんな……開けて!! 雪崩、ここを開けて!! 吹
雪っ! 雪崩を呼んで!」

千代はさるぼぼ達の名前を叫び、引き戸を開こうとガタ
ガタと揺らす。

しかし、引き戸は皆目動かない。さるぼぼ達が近づいて
来る気配も感じない。

「誰か……いないの!? 餅雪、綿雪! 細雪! つ……
根雪、小米雪!」

千代は竹の引き戸を拳で叩く。どんどんと大きな音をた
て。力一杯叩き続ける。

だが、そんな音はまったく聞こえていないかのように、
引き戸の向こうで生き物の動く気配は微塵もなかった。

「そんな……こんなの、どうすればいいのっ……!!」



二、小寿林長屋ニテ

ガラガラとけたたましい音が大通りを二つに分ける。

それは、^{ひでりがみ}魃印の人力車が全速力で走る音だ。

——魃の急ぎの俾^{くろま}には、速やかに道を譲る——帝都の
暗黙の決まりだった。

俊足自慢の車夫が、のっぴきならない事情であると判断
した場合しか全速力を出さないからだ。

兎を思わせる容貌の車夫が二人がかりで引く人力車の
座席には、7尺近い大男と幼い少年が乗っていた。

大股で座す大男の脚の間にいる少年は、振り落とされま
いと必死の形相で男の着物の襟をがっしり掴んでいる。

街を歩く者達に道を開けてもらいながら進む俾は、小寿
林長屋と木製の看板がかかる入り口でピタリと止まった。

「俺が料金を払っとく。お前は先に行け、珠沙華」

座席にいる大男——雨月の呼び掛けに、車の影がしゆる
りと伸びる。

伸びた影は長屋の入り口でするりと立ち上り、人の形に
なった。

^{くろがし}踝に届く長く真っ直ぐな黒髪。白を越えて青さを帯び

る肌の美女——珠沙華に。

珠沙華は玉のように煌めく丸い黒瞳^{こくどう}を惧れに歪め、目
的の家の引き戸を断りなく開けた。

「あつ……」

荒く開いた引き戸の音に、中にいた全員が顔を向ける。
その中に、上がり口に座る千代がいた。

驚きに丸くなっている愛らしい瞳と目線が合い、珠沙華
は心底ほっとしたように顔を緩める。

反対に千代の顔はくしゃりと崩れた。

「ごめんなさい……」

搾るように震える千代の声に、珠沙華は静かに近寄り、
土間に膝をついた。

「謝るのはこっち。つらい思いをさせたわね……」

千代の四肢を見た珠沙華の表情がまた曇る。

小さな手と足の裏は傷だらけだった。既に血は止まって
いるが、傷の赤が生々しい。

追いついた雨月と、雨月と共に俾に乗っていた少年——
千代のすぐ下の弟、一太も一緒に傷を覗き見た。雨

月の左の銀眼帯の飾り鎖がシャラリと鳴る。

「手当ては膏藥^{こうやく}を塗っただけ？ 繃帶^{ほうたい}は？」

「そこまでしなくても平気です。あたし、子供の頃そこら



中走り回って、こういう怪我、しょっちゅうしてたし」

「……誰にされたの？」

「あつ……これは自分でやっちゃいました。門の引き戸が開かないから意地になって叩いちゃって……」

てへへと困ったように笑う千代の横で、母の奈海がやれやれと溜息をついた。

「それを巡查さんに見咎められて、うちまで送ってくださったんだよ。お屋敷であつたことを聞いた一太が、すぐに姐さん達に知らせるって飛び出しちゃって……止める暇もなかったんだ。だけど、あんなに広い公園ですぐに会えたなんて凄い偶然だね」

「丁度、公園を出たところだったの。おかげで助かったわ。ありがとう、一太君」

「だろ？ 千代ねえだって、早く知らせなくちゃって泣きべそかいてたし」

「なっ、泣いてないわよっ！ 一太の馬鹿っ！」

「うっそだー。泣いてたもんねー」

一太の軽口を諷めるように、大きな掌を少年の頭に載せ、雨月が言う。

「妙な軍人の女に珠沙華の家が乗っ取られたっての、巡查には言ったのか？」

「はい。顔見知りの巡查さんだったから、事情を説明した

ら親身になってくれました。一緒に引き戸を叩いたり、声をかけたりしてくれたんですけど、お屋敷からは誰も出て来なくて……あたしが逢梗桐の家の人じゃないから、これ以上はどうすることもできないって言われて。じゃああたし、姐さんが帰るまで門の前で待つって言ったんです。そしたら、怪我してるからって強引におんぶされちゃって……

……そのまま、うちまで送って来られちゃいました……」

「手はわかったけど、なんで足の裏まで怪我してんだ？」

「これは、その……力一杯、引き戸叩いたり、開けようとしてたら、なんだかすっごく力が入ってたみたいで」

「……まさか、裸足で追い出されたの？」

不穏な気配を孕む珠沙華の声に、千代はこくりと頷く。

「えーと、一太からざっくり聞いたけど、必刀隊の隊長で逢梗桐天雄って女の軍人が、珠沙華の親父さんの姉だから、自分が正当な跡継ぎだって言って、部下の兵士を使ってお前さんを追い出したってんで話合ってるか？」

「そうです。姐さんからそんな親戚がいるなんて一言も聞いたことがないし、おかしいって言ったんですけど、聞き入れてもらえませんでした」

「珠沙華も心当たりがないんだな」

「ええ。あたしの父親は一人っ子だって聞いてるわ」

「兵士達ともみ合ってるうちに、さるぼぼ達とも離ればな



れになっちゃって……一緒に追い出されなかったから、たぶん、まだ中にいるんじゃないかな……」

一太の頭をぐしやぐしやと撫で、雨月は踵を返す。

「おっし、わけわかんねえけど、わかった。その必刀隊だかの天雄って女を追いついてくりやいいんだろ？ 俺がひとつ走り……」

「待って」

腕っ節の強い雨月が行けば、万事解決する——全員が、雨月さえもそう思っていたのに、肝心の珠沙華が……逢梗桐の主が止めた。

「うちの引き戸は立て付けは悪くないわ。それに、お千代ちゃんが渾身の力で殴ってもびくともしない。叩く音を聞いても、さるぼぼさん達が開こうとしなかった。あの子達がお千代ちゃんの声に反応しないなんてあり得ないわ。だから、中にいる天雄って軍人は呪術を使って引き戸が開かないようにしているだけじゃなく、音も遮断しているかもしれないわ」

「おう……めんどくせえ。弁償するから壊しちゃっていいか？」

「壊してもいいけど、封印をしている場合は無駄かもしれないわ。それと……気になることがあるの」

一呼吸置いて、珠沙華は言った。

「その天雄って女、本当にあたしの伯母の可能性があるわ」

珠沙華のこの発言に、全員が目を剥く。

「じゃっ、じゃあ、姐さんは、百雲さんが外に子供を作ったって言いたいのかい!!」

驚きに引つ繰り返る奈海の声に、珠沙華は「ええ」と返事をする。

「あながち嘘ではないかもしれないの。家の中に、あたしの血でしか反応しない封印を施した部屋があつて、そこはあたしの血と同じものが無いと戸が開かないようになってるわ。そこが開かれた気配がしたの……たった今。これが天雄の仕業なら、血縁というのは本当かもしれないわ」

「そんな……だったら、姐さんは……」

「天雄が本当にあたしの伯母なら、あたしより逢梗桐の家を継ぐ権利があることになるわね」

不安そうに珠沙華の顔を見つめる千代の頭を、珠沙華は優しく撫でた。

「姐さん……さるぼぼ達、大丈夫かな？ おうちが封印されてるんだとしたら、外に出られないんじゃないですか？」

「あの子達のことだから、うまく隠れてると思うわ」

「で、これからどうするよ、珠沙華」



「あたしの家は、いずれ取り返すわ。もし、天雄が本当にあたしの伯母なら、どこかに家を買うとして……でも、あそこ、どうしようかしら……」

「あそこって？」

「なんでもないわ、お千代ちゃん。ちょっと独り言」

「つてことは、どう転がるかわかんねえうちは宿無しになるな。それと金があ。俺、大半、逢梗桐の家に置いてきちまってるぞ。珠沙華もそんなに持ってねえだろ？」

「財布にあるだけね」

「家ねえ……二週間前、隣が引越して空き部屋になってるけど……」

奈海の提案に、千代が鋭く水を差す。

「雨月さんはともかく、姐さんに長屋に住んでもらうのは気が引けるよ」

「言うようになったなあ、お千代」

「じゃあ、お隣を借りるわ」

奈海の提案を承諾した珠沙華に、千代は目を白黒させた。

「ええっ!? いいんですか!?!」

「勿論。お千代ちゃんのお隣に住めるの、嬉しいわ。そう、壁に穴は開いてるかしら? 開いているところから顔を出したり、お醤油を借りたりしてもいいんでしょ?」
「何言ってるんだい、姐ちゃん。ここ、そこまでボロくねえ

よ」

「こら、一太。珠沙華姐さんになんて口の利き方をするんだい。本当に借りるなら、大家さんに話つけてくるけど……いいのかい? もっといいところに宿を取った方がいいんじゃないかい?」

「どっちにしても、金が足りねえぞ」

「大丈夫よ。お金なら困らないから。ね?」

と言って、珠沙華は膝をついている土間に軽く指を添えた。

○ ○ ○

「こちらです。どうぞ」

奈海から事情を聞いた大家が、さっそく隣の部屋を見せてくれた。

間取りは千代の家と同じ。

勝手口からすぐに土間、そこから二つの小さな和室があり、その向こうにまた土間のある表長屋。

ただ違ったのは……

「畳がないのね」

「前の住人が雑に使っていたせいで使い物にならなくなったんで、今、新しいのを注文してる最中でして……」



珠沙華はシルクのシャツのボタンもはずし、中にするりと手を入れた。

「んんっ……!？」

突然、胸の尖りを指の腹で捉えられ、はびくりと大きく飛び上がる。

「ああ……やっぱり。何もかも初めてなのね？ 清らかさを強く求めているから、こういったことを知識としても知らないのかしら？ ……ふふっ……ふふ……」

楽しそうに嗤いながら、珠沙華はゆつくりとの乳房を捏ね始めた。

「うあっ、あっ……んっ、んんっ……!？」

巧みに乳房をまさぐられ、立っていられなくなったのは、膝からかくりと頽れた。

未知の感覚に翻弄されるの腰に珠沙華は手を宛がう。そのままゆつくり、二人で横たわった。

地面に仰向けにされても逃げぬに、珠沙華はのしかかり、足を絡ませる。

「これはっ……は、はあ……何……？ 貴方は何をしようとしているのですか……」

